

ショートメッセージ

2022年10月23日(日)「礼拝を整える人たち」

聖書箇所：エズラ 8：15-23

暗唱聖句：あなたたちは、主にささげられた聖なる人々です。(エズラ 8：28)

キュロスの勅令が下され、神殿の再建が終わり奉献されるまで約 22 年かかりました。そして、ようやく第 7 章においてエズラの帰還が語られます。祭司であり書記官であったエズラの系図が記されます。モーセの兄である祭司長アロンにつながる正統な祭司であることがこの系図からわかります。エズラはモーセの律法の研究者であり、律法に精通した学者であり、イスラエルの人々に律法と神のみ言葉を教えることに専念しました。神なる主の御手のご加護を受け、求めるもの全てを王から与えられたエズラは、神殿において祭儀と例祭、祭司職、賛美の機能を再開します。

エズラ記の話の中心にはエルサレムの神殿があり、捕囚からの帰還そのものが神殿の再建でした。神殿は神の現存の場であり、祭壇を中心として祭儀が執り行われます。神殿、城壁の再建では敵の妨害、脅迫がありましたが、それでも民たちは協力し合い再建を成し遂げます。捕囚後のユダヤ人たちの宗教共同体の再建でもあり、律法がその基本に、中心にあったということが語られます。エズラの神への賛美と祈りが捧げられ、帰還者たちのリストが記され、神殿への旅が始まります。

再建された神殿は、神のご計画によって建てられ、そして、神の律法に通じた学者のエズラによって守られていきます。全ては神のみ業であり、エズラは神の御手に全てを委ね、全てが成し遂げられることを告白し、神のみを崇めます。今私たちはまだ混乱した時の中にありますが、聖書のみ言葉から神の教えを知り、神さまに全てをお委ねし、信仰の友と共に歩んで参りたいと思います。神からの満ちあふれる祝福は、私たちに注がれています。

8 章では、先ずバビロンから上って来た帰還者のリストが記されます。このリストの書き方は 2 章の捕囚の民の書き方とは違い、先ず、祭司が記されます。最初の帰還は、人々が力を合わせて神殿を再建するということが目的でしたが、8 章では、完成した神殿で行う祭儀に重点が置かれたため、2 章のリストの書き方とは違うと思われます。そして、最初の帰還にはいなかったダビデの子孫がいます。全イスラエルを代表するという意味で、十二の家系の長たちが列挙されます。十二という数字はイスラエルの十二部族を象徴的に述べたもので、再び約束の地に、祭司、王家の者、十二部族の民が入るということを表しています。最初の帰還者は、神の霊的な導きにより奮い立たされましたが、今回は自ら望んでエルサレムへと帰還しました。ただし、エズラが告白している通り神の助けなしには、帰還は成し遂げられなかったでしょう。

エズラは、帰還者の中にレビ人がいないことに気づきます。レビ人は祭司とともに神殿礼拝の奉仕を行い、民に神の言葉を教えるなど、ユダヤ社会において重要な働きを担っていました。レビ人がいなければ、祭儀を立て直すことはできません。レビ人は、エルサレムへの帰還に対して消極的であったと言われていますが、エズラの言葉を伝えられたレビ人は求めに応じて帰還します。そして、レビ人と共に神殿での奉仕を手伝う僕たちも 220 人やって来ます。このこと全てが「慈しみ深い神の御手がわたしたちを助けてくださり」(7 章 9 節)であると告白し、「皆一人一人その名が記録されている。」と書かれている通り、神さまのみ業により、エズラの祈りが聞かれます。神は、祈り、努力したことに応えてくださるだけでなく、期待を越えた恵みを注いでくださいます。どんな困難な中であっても、祈り助けを求め、神のみ業を信じるのが大切だと教えて下さっていると思います。

アハワとはバビロニアの一地方を表す名であると同時に、河、灌漑用の運河のことです。予定よりも遅くなったかもしれませんが、帰還者全体の構成が整い、旅の初めの祈りを断食と共に行います。断食は一般的には、悲嘆、罪の告白の折に神の前にへりくだる行為とされていますが、ここ

では旅の危険からの保護のためとされています。王からの護衛を拒否し、「神の御手」が護ってくださるという強い信仰心を表します。エズラが最も恐れていたのは、エルサレムまでの旅の途中で、敵による攻撃でした。帰還者の中には武装した兵士はおらず、その状態でエルサレムまで行くことは、現実的には非常に危険な行為でした。しかし、断食という自分の命を差し出すほどの切実な行為と祈りを通して、神さまに全てをお委ねし、エルサレムに無事到着します。

ここで、断食についてももう少し触れてみたいと思います。断食というとイザヤ書 58 章を思い出される方も多いかと思われます。特に 58 章 6 節「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。」で語られる断食とは、何が真に神に従う道であるか、神との交わりを開く方法とはどういうことなのか、であるかと思われます。今現在の私たちに置き換えてみるならば、コロナ危機という現状からの精神的脱出を、主は望んでおられるのではないのでしょうか。様々なしがらみから解放され、主の前に平等である私たちは、全ての時において差し伸べてくださっている主の御手に、改めて手を伸ばし触れるという行いを、今こそすべきなのではないかと思います。満ち溢れる愛で主は愛して下さっています。私たちもその愛に命をかけて応えることを、主は待ち望んでおられると思います。

旅の準備は続きます。レビ人の招集、断食と祈り、続いて祭司たちに神殿の祭具を寄託することが述べられます。エズラは十二人の祭司たちに「あなたたちは、主にささげられた聖なる人々です、この祭具も聖なる物で、この金銀も、あなたたちの先祖の神、主にささげられる随意の献げ物です。これをエルサレムの神殿の祭司室で、祭司とレビ人の長たちとイスラエルの家長のいる前で、量って手渡すまで、よく注意して預かってください。」(28 節 29 節 30 節) と伝えます。

7 章 9 節の日付と比べると、エルサレムへの出発は 11 日遅くなったことがわかります。道中待ち伏せる敵の攻撃からも、神の御手により守られます。そして無事、金、銀、祭具類は数にも量にも間違いなく、エルサレムの神殿へと届けられます。神が生きて働いておられること、神は自分を求める者にはその御手を差し伸べ応えてくださることを信じる時、その栄光を現わしてくださいませ。

常盤台教会では、皆さまのご奉仕により、常に礼拝の準備が整えられています。この 3 年間、私たちは置かれた状況の中で礼拝を守ってきました。これからも続くであろう、不安定な状況ではありますが、エズラ記で示された、礼拝のために命がけで教会へと向かうその姿に思いを馳せる時、力強い励ましをいただきます。そして、教会に共に集うということは、「身体性」の確立であると思います。人と人が共に同じ場所に集う時、お互いの空気を感知、知覚や確かな交わりを通して、神さまの愛をそこに見ることができます。

神さまの招きに、湧きあがる喜びを持って、皆様と共に応えたいと思います。

● 分かち合い

- ・ 断食と聞いた時どのようなことを思いますか？
- ・ 全ては神のみ業によるものであったという出来事が最近ありましたか？

(担当：H.I.)